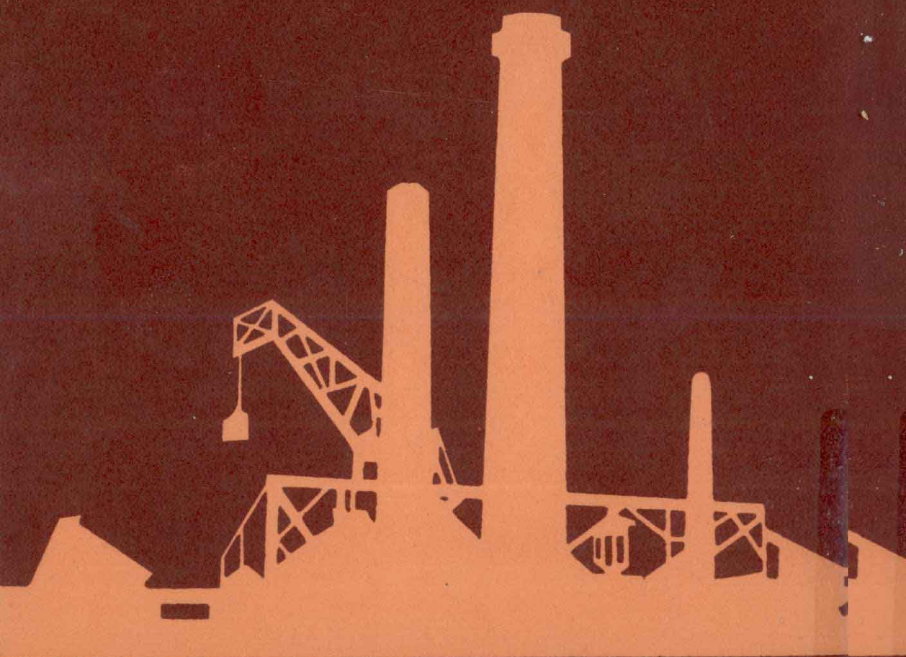


日本プロレタリア作家叢書 第二篇

小林多喜二著

蟹工船



書畫家作アリタレロブ本日本定

第二篇

蟹

戰

小

林

多

喜

二

著

工

社

版

船

編輯

盟同家作アリタレロブ本日本

新選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年10月10日 印刷

昭和55年10月20日 発行

(第20刷)

小林多喜二著

蟹 工 船

戦旗社版

刊 行	財団法人 日本近代文学館 東京都目黒区駒場4-3-55 代表者 小 田 切 進
編 集	名著複刻全集編集委員会 代表者 稲 垣 達 郎
総発売元	株式会社 ほ る ぶ 東京都新宿区新宿2-19-13 代表者 中 森 蒔 人
製 作	株式会社 ほるぶ出版 東京連合印刷株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

蟹 工 船

目 次

蟹 工 船	一
-------	---

一九二八年三月十五日……………三七

蟹

工

船

「おい地獄さ行ぐんだで！」

二人はデツキの手すりに寄りかゝつて、蝸牛が背のびをしたやうに延びて、海を抱え込んでゐる函館の街を見てゐた。——漁夫は指元まで吸ひつくした煙草を唾と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたやうに色々にひつくりかへつて、高い船腹ツイドをすれぐに落ちて行つた。彼は身體一杯酒臭かつた。

赤い太鼓腹を幅廣く浮かばしてゐる汽船や、積荷最中らしく海の中から片袖をグイと引張られてゐるやうに、思ひツ切り片側に傾いてゐるのや、黄色い、太い煙突、大きな鈴のやうなヴィ、南京虫のやうに船と船の間をせはしく縫つてゐるランチ、寒々とざわめいてゐる油煙やパン屑や腐つた果物の浮いてゐる何か特別な織物のやうな……波風の工合で煙が波とすれぐになびいて、ムツとする石炭の匂ひを送つた。ウインチのガラガラといふ音が、時々波を傳つて直接ぢかに響いてきた。

この蟹工船博光丸のすぐ手前に、ペンキの剥けた帆船が、へさきの牛の鼻穴のやうなところから、錨の鎖を下してゐた。甲板を、ドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のやうに、行つたり來たりしてゐるのが見えた。ロシアの船らしかつた。たしかに日本の「蟹工船」に

對する監視船だつた。

「俺らもう一文も無え。——糞。こら。」

さう云つて、身體をずらして寄こした。そしてもう一人の漁夫の手を握つて、自分の腰のところへ持つて行つた。伴天の下のコールテンのズボンのポケットに押しあてた。何か小さい箱らしかつた。

一人は黙つて、その漁夫の顔をみた。

「ヒヒヒヒ……」と笑つて、「花札^{はな}よ。」と云つた。

ボート・デッキで、「將軍」のやうな恰好をした船長が、ブラ／＼しながら煙草をのんでゐる。はき出す煙が鼻先からすぐ急角度に折れて、ちぎれ飛んだ。底に木を打つた草履をひきつツて、食物バケツをさけた船員が急がしく「おもて」の船室を出入した。——用意はすつかり出來て、もう出るにいとばかりになつてゐた。

雑夫のゐるハツチを上から覗きこむと、薄暗い船底の棚に、巢から顔だけピョ／＼出す鳥のやうに、騒ぎ廻つてゐるのが見えた。皆十四五の少年ばかりだつた。

「お前は何處だ。」

「××町。」みんな同じたつた。函館の貧民窟の子供ばかりだつた。さういふのは、それだけで一かたまりをなしてゐた。

「あつちの棚は？」

「南部」

「それは？」

「秋田」

それ等は各々棚をちがへてゐた。

「秋田の何處だ。」

膿のやうな鼻をたらした、眼のふちがあかべをしたやうにたゞれてゐるのが、

「北秋田だんし。」と云つた。

「百姓か？」

「そんだし。」

空氣がムンとして、何か果物でも腐つたすっぱい臭氣がしてゐた。漬物を何十樽も藏つてある室がすぐ隣りだつたので、「糞」のやうな臭ひも交つてゐた。

「こんだ親父抱いて寝てやるぞ。」——漁夫がべら／＼笑つた。

薄暗い隅の方で、伴天を着、股引をはいた、風呂敷を三角にかぶつた女出面らしい母親が、林檎の皮をむいて、棚に腹ん這ひになつてゐる子供に食はしてやつてゐた。子供の食ふのを見ながら、自分

では剥いたぐるぐの輪になつた皮を食つてゐる。何かしやべつたり、子供のそばの小さい風呂敷包みを何度も解いたり、直してやつてゐた。さういふのが七、八人もゐた。誰も送つて来てくれるものゝない内地から來た子供達は、時々そつちの方をぬすみ見るやうに、見てゐた。

髪や身體がセメントの粉まみれになつてゐる女が、キャラメル箱から二粒位づつ、その附近の子供達に分けてやりながら、

「うちの健吉と仲よく働いてやつてくれよ、な。」と云つてゐた、木の根のやうに不恰好に大きいザラ／＼した手だつた。

子供に鼻をかんでやつてゐるのや、手拭で顔をふいてやつてゐるのや、ボソ／＼何か云つてゐるのや、あつた。

「お前さんどこの子供は、身體はえゝべものな。」
母親同志だつた。

「ん、まあ。」

「俺どこのア、とても弱いんだ。どうすべかつて思ふんだども、何んしろ……。」

「それア何處でも、ね。」

——二人の漁夫がハツチから甲板へ顔を出すと、ホツとした。不氣嫌に、急にだまり合つたまゝ雑

夫の穴より、もつと船首の、梯形の自分達の「巢」に歸つた。錨を上げたり、下したりする度に、コンクリート・ミキサの中に投げ込まれたやうに、皆は跳ね上り、ぶつかり合はなければならなかつた。

薄暗い中で、漁夫は豚のやうにゴロ／＼してゐた。それに豚小屋をつくりの、胸がすぐゲエと來さうな臭ひがしてゐた。

「臭せえ。臭せえ。」

「そよ、俺だちだもの。えゝ加減、こつたら腐りかけた臭ひでもすべよ。」

赤い白のやうな頭をした漁夫が、一升瓶そのまゝで、酒を端のかけた茶碗に注いで、錫をムシャ／＼やりながら飲んでゐた。その横に仰向けにひっくり返つて、林檎を食ひながら、表紙のボロ／＼した講談雑誌を見てゐるのがゐた。

四人輪になつて飲んでゐたのに、まだ飲み足りなかつた一人が割り込んで行つた。

「……んだべよ。四ヶ月も海の上だ。もう、これんかやれねべと思つて……。」

頑丈な身體をしたのが、さう云つて、厚い下唇を時々癖のやうに嘗めながら眼を細めた。

「んで、財布これさ。」

干柿のやうなべつたりした薄い墓口を眼の高さに振つてみせた。

「あの白首、身體こつたらに小せえくせに、とても上手えがつたどオ！」

「オイ、止せ、止せ！」

「えゝ、えゝ、やれ〜。」

相手はへゝゝゝと笑つた。

「見れ、ほら、感心なもんだ。ん？」酔つた眼を丁度向ひ側の棚の下にすえて、顎で、「ん！」と一人が云つた。

漁夫がその女房に金を渡してゐるところだつた。

「見れ、見れ、なア！」

小さい箱の上に、皺くちやになつた札や銀貨を竝べて、二人でそれを数えてゐた。男は小さい手帖に鉛筆をなめなめ、何か書いてゐた。

「見れ。ん！」

「俺にだつて婢や子供はゐるんだで。」白首のことを話した漁夫が急に怒つたやうに云つた。

そこから少し離れた棚に、宿酔の青ぶくれにムクんだ顔をした、頭の前だけを長くした若い漁夫が「俺アもう今度こそア船さ來ねえツて思つてただけれどもな。」と大聲で云つてゐた。

「周旋屋に引つ張り廻はされて、文無しになつてよ。又——、長けえことくたばるめに合はされるん

だ。

こつちに背を見せてゐる同じ處から來てゐるらしい男が、それに何かヒソ／＼云つてゐた。

ハッチの降口に始め鎌足を見せて、ゴロゴロする大きな昔風の信玄袋を擔つた男が、梯子を下りてきた。床に立つてキヨロ／＼見廻はしてゐるのを見付けると、棚に上つてきた。

「今日は。」と云つて、横の男に頭を下けた。顔が何かで染つたやうに、油ぢみて黒かつた。「仲間さ入れて貰えます。」

後で分つたことだが、この男は、船へ來るすぐ前まで夕張炭鑛に七年も坑夫をしてゐた。それが此の前のガス爆發で、危く死に損ねてから——前に何度かあつた事だが——フィと坑夫が恐ろしくなり鑛山を下りてしまつた。爆發の時、彼は同じ坑内にトロツコを押して働いてゐた。トロツコに一杯石炭を積んで、他の人の受持場まで押して行つた時だつた。彼は百のマグネシウムを瞬間眼の前でたかれたと思つた。それと、そして 1500 秒もちがはず、自分の身體が紙ツクのやうに何處かへ飛び上つたと思つた。何臺といふトロツコがガスの壓力で、眼の前を空のマツチ箱よりも軽くフツ飛んで行つた。それツ切り分らなかつた。どの位經つたか、自分のうなつた聲で眼が開いた。監督や工夫が爆發が他へ及ばないやうに、坑道に壁を作つてゐた。彼はその時壁の後から、助ければ助けることの出来る炭坑夫の一度聞いたら心に縫ひ込まれでもするやうに、決して忘れることの出来ない、救ひを求め

る聲を「ハッキリ」聞いた。——彼は急に立ち上ると、氣が狂つたやうに、

「駄目だ、駄目だ！」と皆の中に飛びこんで、叫び出した。(彼は前の時は、自分でその壁を作つたことがあつた。そのときは何んでもなかつたのだつたが。)

「馬鹿野郎！こゝさ火でも移つてみる、大損だ。」

だが、だん／＼聲の低くなつて行くのが分るではないか！ 彼は何を思つたのか、手を振つたりわめいたりして、無茶苦茶に坑道を走り出した。何度ものめつたり、坑木に額を打ちつけた。全身ドロと血まみれになつた。途中、トロツコの枕木につまづいて、巴投げにでもされたやうに、レールの上にたゞきつけられて、又氣を失つてしまつた。

その事を聞いてゐた若い漁夫は

「さあ、こゝだつてさう大して變らないが……。」と云つた。

彼は坑夫獨特な、まばゆいやうな、黄色ツほく艶のない眼差を漁夫の上にちつと置いて、黙つてゐた。

秋田、青森、岩手から「百姓の漁夫」のうちでは、大きく安坐をかい、兩手をはすかひに股に差しこんでムシツとしてゐるのや、膝を抱えこんで柱によりかゝりながら、無心に皆が酒を飲んでゐるのや、勝手にしやべり合つてゐるのに聞き入つてゐるのがある。——朝暗いうちから畑に出て、それで

食えないで、追拂はれてくる者達だつた。長男一人を残して——それでもまだ食えなかつた——女は工場の女工に、次男も三男も何處かへ出て働かなければならない。鍋で豆をえるやうに、餘つた人間はドシ／＼土地からハネ飛ばされて、市に流れて出てきた。彼等はみんな「金を残して」内地に歸ることを考へてゐる。然し働いてきて、一度陸を踏む、するとモチを踏みつけた小鳥のやうに、函館や小樽でバタ／＼やる。さうすれば、まるツきり簡単に「生れた時」とちつとも變らない赤裸になつておつほり出された。内地へ歸れなくなる。彼等は身寄りのない雪の北海道で「越年」するため、自分の身體を手鼻位の値で「賣らなければならぬ。」——彼等はそれを何度繰りかへしても、出來の悪い子供のやうに、次の年には又平氣で（？）同じことをやつてのけた。

菓子折を背負つた沖賣の女や、藥屋、それに日用品を持つた商人が入つてきた。眞中の離島のやうに區切られてゐる所に、それ／＼の品物を廣げた。皆は四方の棚の上下の寢床から身體を乗り出してひやかしたり、笑談を云つた。

「お菓子めえか、えゝ、ねつちやよゝ」

「あッ、もツちよこい！」沖賣の女が頓狂な聲を出して、ハネ上つた。「人の尻さ手ばやつたりして、いけすかない、この男！」

菓子で口をモグ／＼させてゐた男が、皆の視線が自分に集つたことにテレて、ゲラ／＼笑つた。

「この女子、可愛いな」

便所から、片側の壁に片手をつきながら、危い足取りで歸つてきた酔拂ひが、通りすがりに、赤黒くブクンとしてゐる女の頬べたをつつついた。

「何んだね。」

「怒んなよ。——この女子ば抱いて寝てやるべよ。」

さう云つて、女におどけた恰好をした。皆が笑つた。

「おい饅頭、饅頭！」

ずうと隅の方から誰か大聲で叫んだ。

「ハアイ……」こんな處ではめづらしい女がよく通る澄んだ聲で返事をした。「幾ほですか？」

「幾ほ？ 二つもあつたら不具だべよ。——お饅頭、お饅頭！」——急にワツと笑ひ聲が起つた。

「この前、竹田つて男が、あの沖賣の女ば無理矢理に誰もゐねえどこさ引つ張り込んで行つたんだよ。んだけ、面白いんでないか。何んほ、どうやつても駄目だつて云ふんだ……」酔つた若い男だつた。「……猿又はいてるんだとよ。竹田がいきなりそれを力一杯にさき取つてしまつたんだとよ、まだ下にはいてるツて云ふんでねか。——三枚もはいてたとよ……」男が頸を縮めて笑ひ出した。

その男は冬の間はゴム會社の職工だつた。春になり仕事が無くなると、カムサツカへ出稼ぎに出た

どつちの仕事も「季節労働」なので（北海道の仕事は殆んどそれだつた。）イザ夜業となると、ブツ續けに續けられた。「もう三年も生きれたら有難い。」と云つてゐた。粗製ゴムのやうな死んだ色の膚をしてゐた。

漁夫の仲間には、北海道の奥地の開墾地や鐵道敷設の土工部屋へ「蛸」に賣られたことのあるものや各地を食ひつめた「渡り者」や、酒だけ飲めば何もかもなく、たゞそれでいゝものなどがゐた。青森邊の善良な村長さん選ばれてきた「何も知らない」「木の根ツこのやうに」「正直な百姓もその中に交つてゐる。——そして、かういふてんばら／＼のもの等を集めることが、雇ふものにとつて、この上なく都合のいゝことだつた。（函館の労働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂ひになつてゐた。青森、秋田の組合などとも連絡をとつて。——それを何より恐れてゐた。）

糊のついた眞白い、上衣の丈の短かい服を着た給仕が、「とも」のサロンに、ビール、果物、洋酒のコップを持つて、忙しく往き來してゐた。サロンには、「會社のオツかない人、船長、監督、それにカムサツカで警備の任に當る驅逐艦の御大、水上警察の署長さん、海員組合の折衝」がゐた。

「畜生、ガブ／＼飲むつたら、ありやしない。」——給仕はふくれかへつてゐた。

漁夫の「穴」に濱なすのやうな電氣がついた。煙草の煙や人いきれで、空氣が濁つて、臭く、穴全